

22. 子ども虐待の長期予後

1990年代にアメリカの疾病予防管理センターで行われた「ACE study」という有名な研究がある。ACEとはAdverse Childhood Experience（子ども時代の逆境体験）のことで、心理的虐待、身体的虐待、性的虐待、心理的ネグレクト（愛されない、関心を持たれない）、身体的ネグレクト、家庭内暴力への曝露、家族の依存症（アルコール、薬物）、家族の精神疾患や自殺企図、両親の別居や離婚、家族の犯罪歴などと定義されている。これらの逆境体験を数多く体験した人ほど、成人してから虚血性心疾患、がん、慢性閉塞性肺疾患、脳卒中、糖尿病などの罹患率が高く、肥満や喫煙、過度の飲酒、性的乱交、薬物使用、自殺企図など健康をリスクにさらす行動が多くみられ、寿命も短くなることが明らかとなった。

この研究は、小児期の虐待対応は今ここにある生命の危機を回避すればそれでよい、というわけではないことを教えてくれる。

1. 虐待が身体に及ぼす影響

人間は危機的な状況に置かれると「3つのF」とよばれる防衛反応を起こす。これは「Fight(闘争する)、Flight(逃走する)、Freeze(固まる)」の頭文字をとったものであるが、虐待の環境下に長らく置かれている子どもたちは「世の中は安心、安全」という感覚を持ちにくいいため、日常生活においてもこの「3つのF」のスイッチが入りやすくなっている。周囲を警戒することが習慣となり、脳は過覚醒（何か起こるのではないかと警戒してピリピリしている状態）と不安の状態に繰り返し置かれることになる。すると、警戒する必要のない日常の出来事に対しても「闘うか、逃げるか、固まるか」といった緊張が起これ、視床下部、下垂体、副腎においてストレス反応が生じ、ストレスホルモンが分泌され続けることになる。また、慢性的なストレスによって脳の形態や機能が変性し、ストレス反応を制御できなくなる（ストレスに対する緊張状態が解除されない）こともわかっている。その結果ストレスホルモンにさらされることが常態化し、体内の免疫反応が狂うことで生涯にわたる健康被害をもたらすといわれている。

また、保護者や周囲の人から大切に扱われなければ子どもは「自分の存在には価値がない」と思うようになり、自分の健康に無頓着になる。ネグレクト環境で育った子どもは「清潔にする」「健康に良い食事を摂る」といった、健康に生活するための方法を知らずに成長する。そのことが、肥満や喫煙習慣、薬物乱用などの自分を傷つける行為を招き、疾病に罹患する率が上昇し、寿命の短縮につながるメカニズムもある。

2. 虐待が心の発達に与える影響～発達性トラウマ障害とトラウマインフォームドケア～

トラウマ研究で有名なベッセル・ヴァン・デア・コークは破綻した養育システムで育つ子どもに見られる様々な症状や問題行動について、「発達性トラウマ障害」という概念を提唱した。①情動や衝動をうまく調節できない、②注意と集中に問題がある、③自分や他者と仲良くやっていくことが難しい、という3つがこの障害に見られる一貫した特徴であるとしている。

1) 情動や衝動の調節不全

自分の情動や衝動を調節できるようになるためには、大人が「お腹がすいたんだね」「怒ってるのかな」「嬉しいね」「叩いちゃダメよ」など、言葉で子どもの状態を表し、共感したりストップをかけたりすることがそのファーストステップになる。その後、徐々に自分の気持ちや感覚を子ども自身が認識することで情動の調節や衝動の統制が可能になり、さらに人に伝えて共感してもらったりなだめてもらったりする力も育つようになる。

虐待やネグレクトの環境下で育つ子どもは自分の状態を言葉に置き換えてもらう体験が少ないため、自分の中に生じる衝動や不快な気分が何に由来するのか、どう扱ったらいいのかわからず、人に助けを求めることも叶わず（「お腹がすいた」という状態を認識できなければ、それを人に伝えること、その状態から回復させてもらうことができない）、なかなか落ち着けなかったり、衝動統制が困難であったりするわけである。

②注意と集中の問題

目の前のことに注意を向けて集中し続けるためには、心身ともに安全な状態でなければならない。過覚醒の状態が続いている子どもは常に警戒のためのアンテナが張り巡らされているために注意が逸れやすく、生存に関係のない言語処理や学習に集中し続けることは困難になる。また、身体虐待や性的虐待などに晒され続けると、辛さから意識を逸らすために注意や集中のスイッチを切ることが習慣になってしまうこともある。

③自分や他人と仲良くやっていけない

社会の中で人と関わっていくにはまず、相手が自分に危害を加えないという信頼感が基本となり、自分もそこにいて良いのだという自己価値が育まれていなければならない。虐待環境下に置かれた子どもたちは、人一倍愛情に飢えている一方で、相手をとことん警戒しなければならない、という引き裂かれた心のまま他人と関わらなければならない。虐待を受けた子どもが大人を試したり、挑発したりしてしまうのはそのためである。

発達性トラウマによる影響は、適切なケアが提供されなければ成人期の行動様式や対人関係、精神状態にも大きな影を落とす。「虐待の世代間連鎖」と呼ばれるものも、虐待してしまう保護者が幼少期に虐げられ、そして誰からも助けってもらえなかったことに端を発しているかもしれない。

しかし、癇癪を起してばかりで暴力的、勉強もしないし、人を怒らせるようなことばかり言う・・・そういった子どもたちは、叱責の対象となる、あるいは支援を諦められてしまうことがほとんどで、ケアにつなげられることはあまり多くはないであろう。また、支援の手を拒絶する、すぐに攻撃的になる、医師の指示を守らない、そういった保護者が「ケアの対象」と考えられることもなかなかない。その結果、親子は他人や社会への不信感を強め、「自分は助けをもらう価値もない」という歪んだ自己認知が強化され、孤立していくことになるのである。

ただし、頼りにできる人の存在、思いやりのある人との信頼に満ちた関係は、逆境からの立ち直りを促進する因子であるといわれている。虐待をめぐる様々な問題を考える時、それは保護者のせいでも子ども自身のせいでもなく「トラウマが引き起こす問題である」と考える「トラウマインフォームドケア」の視点を持って支援を継続することがとても重要だ。

虐待の対応に当たっては目の前で生じている虐待を見逃さないこと、子どもが虐待で命を落とさないために適切に対処することが最重要事項なのはいうまでもない。しかし「子ども虐待の長期予後」を考える時、かつて逆境を生きてきた保護者とつながり、今逆境に生きる子どもを支え、トラウマの影響からの回復を手助けし続けることが、子どもの将来、さらにその先の未来を生きる子どもたちの安全を守ることにつながるのである。